



Title	サティヤナーラーヤナ・ヴラタ・カター
Author(s)	バール, バールクリシュ
Citation	印度民俗研究. 1978, 5, p. 26-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50300
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

サティヤナーラーヤナ。ヴラタ。カタール

パールクリシュナ。パール

第一章

ムニ、こぞりて合掌し、恭しく申し上げたり
リシよ、われらに慈悲の眼差しのかげらを恵み、深遠なる物語を世のため説き給え

望むがままの御利益を恵みムニの心を喜ばせ転生の苦悩を滅し如意樹の如く
万能なるヴラタ。カタールを何卒聞かせ給え
ヴィヤーサ仙は語られた。望むがままの御利益の得らるる
ヴラタ。カタールを物語り、耐え難い苦しみのすべてを焼き尽くさん
それでは語り申そう。その昔のこと
このヴラタのそもそもの発端を余さずお聞かせ致そう
シャオニカを始めすべてのリシが八万八千人集い
悟りを得たスータ仙がナイミシヤの森を訪れた

郭公の声は実しく、雲を待つチャータカ鳥の
亢星の滴で潤う清らかな声、これぞ人々に安息を与う

時は限りなく麗しく心地よく
美しい自然にすべてのリシの心は魅了されたり
鸚鵡、郭公、孔雀それぞれに喜びの歌を歌い
神の測り知れぬ遊戯を目にして喜び
天の無数の星は戯れに耽り
契りを結んだのか月も交わり遊ぶ
恭しく頂礼しリシたちは讃え奉り
スータ仙は祝福を与えんと海中に真珠を探るように心を探られた

ムニは喜び語られた。吉祥の山の如きリシよ
麗しいかんばせのリシよ、何事なりとお命じ下さいませ

御慈悲をかけこの世で幸いと富を授け
束縛を解き放つヴァタを教えて下さいませ

スータ仙は語られた。ムニたちよ、その昔の喜ばしいこのでき事を聞かれよ
世界の救いを念じナーラダ仙が世をめぐっていた
人々はすべて世の束縛に苦しみある者は病いにまた金に苦しみ
様々のわけありて一人も幸福な者がいぬのをナーラダ仙は見た
声をあげて泣く母親たち、息子を失い慟哭する母親たち
夫に先立たれ嘆き悲しむ妻。幾夜も別離の苦しみに我が身を忘れる女
娘たちは兄弟をなくし父は息子を失い
わずかな食物のために苦しみ悲しみ惨めな思いをする

多くの手だてを心にめぐらせ迷いは去らず
救いを求めてナーラダはヴィシュヌ神の都に赴いた

四本の手には法螺貝、チャクラ、ガダー、それに美しい青蓮を持ち
野の花の花輪を黄衣にまとい蛇王を臥床になす徳の館
ラクシュミーは足下に跪き蓮華の御足をもみさすり
御顔より発する光は無数の日輪の如くに汚れなく輝き尽きることもなし
艶やかな青蓮の眼に蜜蜂は酔いしれ蓮華の御顔の上を舞い
全宇宙もその荘重な様にわが身の軽さに恥じ入る
神の御姿にナーラダ仙は心をうたれて見入るばかり
例えるべき言葉もなく、さしもの賢者も痴呆のよう
涼気の助けてナーラダ仙を焦がす苦しみは消滅した
麗しい御顔に目を上げることも恥じられ、祈り始めた

そのかんばせは仲秋の月の如く涼やかにして信徒の胸なる天より恐れを除く
シヴァ神の心にかないラマー女神を喜ばす
その御姿は測り知れず、力の山にたとうべき神よ愛の木立ちに住み給え
神々は下僕となり戸口に立つ
蓮のかんばせはこの上ない美の館。この世の苦と呪いを打ち破る
つややかな青蓮の眼と知徳の山
法螺貝に見紛う首に大なる腕、黄衣には野の花の飾り
信愛を害する者の毘となり信愛の徒の憩いの場となる

ナーラダ仙はヴィシュヌ神の蓮の御足に頭をすりつけ申し上げた。蓮にまごう
慈悲をたたえ属性を超え完全なる神、尽きるを知らぬ甘露の山にもたとうべし

無尽の光の主、幸いを与える類なき力の主
始めも中間も一切御身にはなし無限の徳を備え
万物の創造の礎であり信徒の苦しみを滅せられる
徳の宝庫、御身は常に崇められ全世界を始められる
海の如く湛えた慈悲と無限の徳はもはや讃えるすべもない
如何にすればわたくし如き至らぬ者が御身のすべてを知り得ましょう
永遠にして欲望を離れ美しい冠と耳輪を飾る神よ
御身は大森林の如く巨大で麗しさは千万のカーマ神も及ばぬ

ナーラダ仙は祈りをくり返し御足に額づけば
睡眠は開かれ三界の主は目ざめ給うた

常に信徒の幸いを慮り情け深い心と欠けることのない御業の神に榮あれ
信徒の控えるのを見るや立ち上がり主は歩み寄られた
抱擁し座にかけさせ息災を訊ねかけられた
どこをめぐってきたのか、何故どのように打ちひしがれておるのか
どうしたのか、すべてを余にうち明けるがよい
悲しみの原因を明かせ。余にはすべての苦を除き得る力がある
ナーラダ仙は心を落ち着け申し上げた。何もかもお話しいたしましょう
世の人々の苦悩と嘆きをわたしは如何ともなし得ませぬ

信徒の守り主よ、わずかの勤めで悲しみを除き
苦海を渡れるような手立てを授け給え

憐れみ給いて神よ、新しい手立てを授け給うならば
わずかに勤めるだけで人々の苦悩は払われるでありますよう
世界の苦しみを見てわたしは決心致しました
主のもとに伺いこの耐え難い苦悩を取り除こうと
主はその時微笑み給うた。汝は常に世のために案ずる者
信徒の手本とすべきナーラダよ、汝は常に余の喜びを増す
余は汝に教えよう。幸いを与え苦を砕き
迷いと幻を滅し望みのすべてをかなえるヴラタを

多くの尊い苦行と祈りをもつてなお得難い救いを
余の力でたやすく得られるこのヴラタの恵みを何と言おうか
ナーラーヤナの言葉にナーラダ仙の心は満たされた
あたかも貧者がクヴェーラ神の宝庫を得たかの如く

畏まりナーラダ仙は申し上げた。主よ、作法を余さず授け給え
喜びとともにいつ誰がどの時刻に行なえばよろしうございましょう
ヴラタを行なえばどのような御利益が得られましょうか、どうかお教え下さいませ
かつて誰が、どのように行なったものか、御心に隠されたすべてを明かし給え
ナーラダ仙の汚れない言葉をナーラーヤナは嘉し給い
子と幸運と息災を与えるヴラタの作法を語りだされた
常に深い信心を抱きヴラタを行ない守る者は
富み栄えあらゆる幸福を享受し彼岸へ到るであろう
いずれの日であれ美しい夕べに親しい友達を招き
深く信じて礼拝しバラモンたちに布施を行なうがよい

甘蕉の実、牛乳、牛酪、乳酪と小麦の粉を、小麦がなければ米の粉
それにビンロウジと塩を供えよ

食してよいものすべて四半分増の分量づつ恭しく捧げ
賛歌を歌いカターを開きマントラを読み讀えよ
バラモンに布施を施し食事をし、行ないを慎み
禁欲を保ち真実を語り、かようなあらゆる正行をなせ
満月の日あるいはめでたい日ならばいつであれ
戒を守り余のカターを開き人にはみな優しく応接せよ
日々余を身近に知り余の者となる人は
聞け、まこと余の言葉通り、余の世界に生まれるであろう

神の言葉に宿る光は暗黒と不浄と闇のすべてをうち払い
到達し難く不可知な神のカターにナーラダ仙は歓喜した
主の御足に再び頼づき祈った。神よ人々の苦を除き
黒雲となりやつがれの汚れきつた思いを清め給え

神は喜び無上の幸福を授けるこのお告げを語り給うた
ナーラダよ、カターは転生の苦を滅し信徒の心を深い至福で満たすもの

面に喜びを表わし恭しくリシたちはスータに申し上げた
どうかこの先を語り給え

第 二 章

心静かにこの先を聞かれよとヴィシュヌ神は
心清らかなナーラダ仙に語り給うた

スータは語られた。リシたちよ、寂静、慈悲の館であるヴィシュヌ神は
かようににこやかに美しいカターを語りだされた
この上なく神聖なカーシーの町に一人の貧しいバラモンが
世の海に漂よい荒波にもまれ耐えながら暮らしておった
さて、ある日のこと、飢えと渇きがこのバラモンを苛み始めた
心は乱れ神を心の内に念じ始めた
神は心寛い御方。なのに何故わたしを苦しみから御救い下さらぬのか
慈愛の庫の如く情けある御方があわれな者の苦しみを払うのにためらわれるとは

落涙し心より御名を呼び歌い始めた
主よ、わたしをお忘れになられるとはわたしが何の罪を犯したのでございましょう

信徒の守り主よ、わたしを苦しみより救い給え
世界の養い主よ、わたしを苦しみより救い給え

主は幾千人と救い給うたけれど、それもわが身が救われてこそ
真実と信じましょう。なぜわたくしめにはすぐと参らぬのでございましょうか
どうか苦しみから救い給え
慈愛の海と呼ばれ苦しみを除くことを御業となさりながらわたしのことは
お忘れになられているとは
どうか苦しみから救い給え
御身の名を汚すことなく、渦に巻きこまれたこの小舟を救い給え
どうか苦しみから救い給え
後生でございませう。これ以上苦しめ給いませぬよう
御姿を現わし給え。幾千回とお祈り申し上げます。どうか苦しみから救い給え

あわれな信徒の嘆きの声を聞かれると心を見通す御方は現われて

三界の主はこの上なく美しい眼差しをした老人の姿を取り給うた

慈悲の雨を降らせる雲、浄光を放つ宝石、万人の心に宿られる御方
優しい心の主、ムニにいとしい御方、光輝の中心であり喜びに満たされた御方
老いた御姿ではあれ淨らかに類なく喜びを与える青蓮の眼
光輝を放ち苦を滅し
悩める者を喜ばせ生死の恐れを打ち砕き常に正浄にして終わりなし
幻力を発揮しすべてのものを喜ばす正浄威厳の神
放逸、慢心を除く青蓮の眼の主、慈悲の海にも比すべき御方、幸いを分かち
シヴァ神の蓮の御胸にいつも舞う蜜蜂を楽しませ給う

かのバラモンは主とは気づかぬながら心は落ちついて
激しい苦悩は消え、貧窮の苦しみは薄らいだ
主は近寄られ、この上なく親身な御言葉をかけ給うた
バラモン殿よ苦しみをすべて話してみなされ、何を悲しみ何を望んでおいでじゃ
バラモンは言葉も恭しくへり下り合掌し、いつも布施をいただいては
腹を満たす苦しくあわれな暮らしを語った
飢えと渇きに喘ぎつつ、いつまでこの世にとどまらねばならぬのでありましょ
何をなし、いずこへ行けばよいのでございましょう。この嘆きの生にからめとられては

この束縛を解き放ち惨めで幸少なき者のあらゆる苦しみを
うち払う手だてを教えてください

その時老人の姿をした主は語り給うた。これはまた、望むがままの御利益が
欲しいのならば、どうしてまどうておいでじゃ。ハリ神におすがりなさらぬか
ナーラーヤナの有難いウラタを行ない望むがままの御利益を得
この世に幸いを受け、さらにはたやすく解脱が得られましょに
主は信徒に自らのウラタの作法を自ら教え
自らに沈潜し自らを思念し給うた
ウラタの作法を余さず授け、主はその場から隠れ給うた
苦海を渡らせ給う神は慈愛の宝庫のごとくあらせられる

一方、かのバラモンは喜びに紅潮し
胸に期待をいだいて家路を急いだ

あたかも広大な海原に光りを放つ燈台の火のように
天上には無数の星が輝いておった
バラモンがわが家に着けば夜もとうに更け
暗闇の褥を敷き終わり密やかに眠りにいざなうが
ハリ神の色彩に染められたバラモンの眼はそちらを見ることもない
頭の中には神にまみえる至福の夢があるばかり
夜明けとともに町に行き布施を求めて持ち返り
礼拝、ウラタを行なおうと物狂おしく気は急くばかり

熱情は押え難く眠られず
神にまみえんとする狂おしさはつのにつもの

わずかに寝入ってはすぐさま起き上がり朝の光りももどかしく
ナーラーヤナの名号を唱え家人に言い聞かせた
中庭を掃除し草の庵を清め
ウラタを行ない幻力にて人をたぶらかされるあの御方に嘉されよ
わたしは町に行き布施を受けて参る
疑念を払いわたしの言葉の通りに行なえ
御言葉通りにしましょう。御主人様、御安心なさいませ
作法通りに主を祭ります程に常と変わらず神を信頼なさいませ

妻の言葉に喜び神を念じ
布施を受けにバラモンは町に赴いた

ウラタの御利益で普段に倍する布施を受け
家に帰るとあらゆる幸福を授ける主を作法通りに礼拝した
友人縁者と相揃って信心にわれを忘れた
主は嘉され、バラモンは苦より逃れ富み栄えた
スータは語られた。リシたちよ。この他に何をお望みでござる
主は喜びにひたり甘露の雨を降らされる御方
リシたちの長が甘美な歌を歌い神をたたえ始めた
ナーラーヤナに栄えあれナーラーヤナに栄えあれ

ラマー女神の主ヴィシヌは語り給うた。この無上に尊いウラタは
望むがままの御利益を授け生死の海を渡す橋のごとし

ナーラダ仙は喜び合掌し申し上げた
主よ御言葉の賜物を僕にいくたびも恵み給え

ハリ神は嘉し語り給うた。この先を聞くがよい
バラモンの正しい行ないを汝に語ろう
かわることなく余に帰依し余のみを念じ
堅く余を信じて苦海を渡り始めた
満月のある夜恵まれたバラモンはヴラタを行ない
友人、縁者と寄り集いナーラーヤナの名号を唱えていたところへ
飢えと渇きに苦しみうちひしがれ
熱気に喘ぎ息も絶え絶えの一人の薪売りの男がやってきた

頭より荷を下ろし男は心を静め言つた
バラモン殿水をお恵み下さいませ。苦しんでおります。どうかお助け下さいませ

バラモンはにこやかに水とおさがりとチャラナムリタを与え
扇であおぎ足をもみ優しい言葉をかけてやつた
言うがよい、どうすればお前のためになろうか
お前の言葉のままに喜ぶ湧りにしてつかわそう
バラモンの深い情けに薪売りは喜びただ見つめるばかり
心の内で、この御方は人か神かといふかった
男は恭しく訊ねた。バラモン殿はどなたを念じていらっしゃるのです
情けをかけあらゆる人の心を魅了しておいでなのは

お情けでございます。どうかわたくしにその秘密を明かして下さいませ
どの御方に仕えれば望むがままの御利益があるのでございましょうか

薪売りは言葉もうるわしく申した。早く教えて下さいませ
どのようにして富まれ、苦しみが消えたのでございましょうか
バラモンは語つた。他でもないナーラーヤナ神の僕として主のみを礼拝し
ナーラーヤナのお下がりをしていただき清らかな感謝を捧げヴラタを勤めているのじゃ
かつて余も貧窮に苦しんでいた時、神があらわれ給い
御自身ヴラタを授けすべての幸いを与え歓喜を与え給うた
まさにナーラーヤナの御慈悲によりナーラーヤナの御姿をおがんでいるのじゃ
ナーラーヤナこそ遍在し、ただナーラーヤナのみが實在であらせられる

神の思し召しによりめぐり合い

ナーラーヤナのヴラタは果てもなく世のすべての病いをいやす

ナーラーヤナを念じ心のままの供え物をお供えせよ

神の御慈悲によってこそ神はあらわれ給う

薪売りは幸いを授ける麗しい言葉を聞き喜びを顔にあふれさせ

感謝を捧げ、ヴラタを行なうことを誓い貧しいわが家に戻った

その夜は夢の中の女王のように美しく、細いまき毛のように安らかに

この上なく清らかで、楽しくうるわしかった

夜明けと共に名号を唱えながら起き上がれば

薪売りの寝入るとともに深い苦しみも眠ってしまったかのよう

用足しを済ませ向かった場所は

天と地の接する深い森

木を切り集めて日暮れに町に赴けば

金持ちたちが倍の値で買ってくれ、有頂天

礼拝のすべての供物、牛酪、牛乳、砂糖に小麦の粉、甘蕉、キンマ

浄らかな器を買いととのえヴラタの作法を思い心は一杯になる

友人縁者をみな呼び招き

バラモンを丁重に呼び急ぎ家に帰った

涙を手にくい深く帰依して供え

心を清浄に燈明をともし心の内で歌った

わたしめの礼拝を嘉し給え

慈悲深く信徒を愛される御方、おいでになりわたしめを救い給え

すべてを捨てて来た上は御身の門口を離れてどこへ行かれましょう

あわれと思し召してわたしめの礼拝を嘉し給え

何をもつて御身に仕えどのようにすれば御身にお喜びいただけますよう

どうかわたしめの危難を取り去りわたしめの礼拝を嘉し給え

香と燈明と供物を捧げ再び布施を施し

バラモンを喜ばせ心底からとどこおりなくヴラタを終えた

このカターをいつであれ歌う者は罪を清め

偽りと迷いから離れ幸いと富を得る

神みずから物語りナーラダ仙の聞いたこのカターを

ヴィヤーサ仙が歌いバーラが再びここに語り申した

第 三 章

ナーラダ仙は合掌し語った。亢星の雨滴を待ち焦れる郭公のように、この世のために
待ち望んでおります。慈悲の黒雲にもたとうべき御方、このカターの先をお聞かせ下さいませ
ふくよかに見る者を酔わしめたとえようもなく美しくその吐かれる息は天啓となる
ヴィシュヌ神はカターを語り始め給うた

スータ仙は語られた。リシたちよ、カターのこの先を物語り
このヴラタを誰々が行なったものか、余さず語りましょうぞ
ある美しい王国にウルカ ャムカという一人の王がおった
真実を離れず聡明で食事の前には必ず礼拝し
布施を施しヴラタを行なうことを日々の務めとしておった
貞淑なる妻はまことに夫に富と幸いをもたらし、その面は
月のかんばせのように美しく夫に愛され、夫を神のごとく敬まうのであつた
蔭日向なく舅、姑に仕え^{ダルマ}法に従う尊さを知っておった

バドラシーラー河の岸辺に坐し、徳高い王は
ヴラタを行ない神に愛でられようと礼拝に没頭しておった

その名をサードゥと申す一人の恰幅のよい商人が商いのためそこを通りかかり
河を渡ろうと岸に立った時王を認め何事ならんと考えた
商人は王の傍に歩み寄りうやうやしく礼をした
言葉もつつましく語った。王もまた礼を尽くした
どなたを拝み、どなたに祈っておられます。商人は訊ねた
どうか教えて下さいませ。何故にためらわれるのでございましょう
王は高ぶりもせず答えた。聞くがよい。これは世にすぐれたナーラーヤナ神への^{ヴラタ}願行にして
聖者、苦行者の支え、ナーラーヤナ神の救いにあずかる拠り所なり

子を授かるようにと神の蓮華の御足にすがりつつ
この清浄なヴラタを行なっておるのじゃ

この上なく喜ばしい言葉をサードゥはわが耳で聞き
願いが成就しあたかも魂が歓喜の声をあげるかのようにあつた
手前にも子が授かりません。このヴラタを手前も行ないたくぞんじます
どうか作法を余さず教えて下さいませ。ナーラーヤナの名号を手前も唱えます程に
王は礼拝の作法ときまりごとを余さず教えた
商人は聞いてまるで翠玉の首飾りでも手に入れたかのように喜んだ
わが家に戻ると商人は妻を呼び寄せ
子宝の授かる有難いヴラタについて余さず語り聞かせた
妻のリーラーヴァティーは、これは善根が果を結んだのでございます、と申し
心弾ませ微笑みこの世の務めに耽った

慈愛の主にして信心を見ては直ちに嘉されるナーラーヤナは
この上なく清浄にして崇高ですべてをお見通し

さてハリ神のお恵みによりリーラーヴァティーは身籠り
月満ちて美しく健やかな娘が誕生した
その名をカラーヴァティーと名付け慈しみ育て始めた
月のかんばせにも比すべき乙女の美しさは日毎に輝きを増していった
夫にリーラーヴァティーは言った。さあどうかヴラタを行ない
常に新たな感謝を抱き主の御名をお唱えなさいませ
よしよし。お前が案ずるには及ばぬ。せくことはない
この娘を嫁がせる際にヴラタを行ない感謝を捧げる程に

愚かなサードゥは営利に我を忘れ
財を蓄え続けては慈悲深い主を忘れおつた

さて、かの美しい娘は日毎に成長してゆき
月のかんばせのように美しいカラーヴァティーの美しさに月も恥じ入る程になった
あどけなさはいつしか恥じらいをおぼえすねるようになり
ひそやかに娘の胸はふくらみだした
遊戯に我を忘れた蕾がいまや連れ立ちを求めて花開こうとしていた
微風は額の房毛と戯れ吹き過ぎ甘美な微笑みは口元にこぼれ
うつ向いてはおのれの姿に恥じらうかのようにあつた

翳りない美しさと無邪気さと象の歩みと輝くかんばせと

若葉にまさりふくよかな足と麗しい蓮華の瞳

雪をいただく山頂に黄金の水瓶を飾ったかのような
美しい胸元は陽の光のようにまぶしく輝いた
年頃を思いサードゥの心に不安が生じ
立派な婿を探そうと胸の奥深く入って行った
ある日暁の女神が紅を差して出かけようとする頃
サードゥは喜び勇み賢明な使者を呼ばせた
丁重に使者に席をすすめ要件を語った
娘の婿を探しだし手前の望みをかなえて下され、と

立派な婿を探すよう命じ
眠りを忘れ挙式の用意を整え始めた

命を受けて使者は町から町を、村から村を巡り
カンチャナの都に到りようやく仕事が成就した
誓いたがえぬ使者は商人の端正な若者を
サードゥが待ち構えるところへ直ちに連れ戻った
親類、縁者が皆寄りつどい作法通りに婚姻の式を挙げ
めでたい歌を歌ったけれど、またしても主を忘れおった
娘を商人に嫁がせ肩から荷をおろしはしたものの
ヴラタを忘れ去ったがためナーラーヤナ神の御立腹を招いた

神は御怒りになられ、その罪の重さを見てとられた
いかに慈悲深いハリとても正義はおろそかになさるわけにはゆかぬ

婿を連れてサードゥは商いに出掛け
以前のヴラタの誓いを忘れ果てる程に商いに熱中した
漕ぎ行く程に船はラトナブリーについた
美しい町を岸に見るとサードゥは船をとめさせた
その地はチャンドラケートゥ王が治め
臣民はみな幸福に男も女も安心して往来を行き来していた
他ならぬナーラーヤナ神の意をうけた盗賊たちが王の財宝を盗み出し
商人の泊まったところへ隠し置いた

神にそむくならばすべては裏目
蜜が毒に、父母が閻魔にかわるというもの

王の捕縛吏たちは見てとるや二人をひっ捕え
弁明に耳を貸さず皆を縛りあげ鎖でつないだ
捕縛吏たちは二人を王の御前にひきたて
財宝を発見したいきさつを余さず奏上した
あわれな商人どもには何のお訊ねもなく牢獄に投げこまれ
財貨は残らず没収され二人は捨て置かれたままとなった
さて、ムニの各々方、話変わってかの商人の妻と娘は如何にというに
母娘ともどもひどい苦しみに陥った。天の定めなるものは避けようがござらぬ

家財一切盗賊の手にかかり
ために二人はよその戸口に立つては糊口をしのぐ羽目にいたった

二人はうちひしがれて心の内に主を念じ
何故にこのような境涯に立ちいたったものかと案じ始めた
慈悲の主はたぶん御自分の慈悲心を捨ててしまわれたのであろう
苦しむ者の主と呼ばれることを恥じ御顔をそむけられたのであろう
悲しみ嘆きつつリーヴァティーにカラーヴァティーは暮しておった
愛しい夫の帰りを待つうちに主の御足を念ずる心は強くなっていった
ある日のこと吉祥の刻、夕べの女神が朱のサリーをまとい
闇の黒髪をなびかせ逢いびきに天より舞い降りた

神への測り知れぬ信愛の念に目覚め
カラーヴァティーは抑えきれずに思わず唱えだした

罪人の救い手、聖者の抱き所であらせられ
苦しむ者をあわれまれ、苦海にかかる美しい橋のような
主の御足におすがり致します
シヴァ神の胸の湖に住むマラーラ鳥に乗る弁財の女神を念ずべし
清浄なる四果をもたらす蓮の御足の埃を額に頂くべし
愛欲、憤怒、傲慢、貧欲の敵には蓮の御足は心強く切れ味鋭き刀なり
愚かなる心よ、常に満足を心に念ずべし
されば、汝は彼岸に渡り、妙なる喜びを得ん

夜空はこよなく澄み渡り清らかな月が見下ろし
満月の夜であれば、月光がさえわたっておつた
睡蓮は戯れに耽り、ジャスミンは蔓草によりかかり
夜香木と金黃木はハリ神の戯れに咲きほこり
螢は頭に素晴らしい考えがひらめくようにきらきら光を放ち
心は歌をくちずさみ、せせらぎの音は筋をつけていた
自然の美しい姿はあらゆる人の心を魅了してやまず
吉祥星のように再会の新しい望みをさし示していた
想いの海にただよいカラーヴァティーはさまよい出た
夜も更けて帰りつけば案じた母は問いかけた

ずっと待っていたのだよ。母は優しく訊ねた
どこでどうしていたの。ごらん、夜はこんなに更けたのに

娘や、どうして黙っているの。さあさあ、話しておくれ
何を思っているのか、包み隠さず教えておくれ
母上、おやめ下さい。何故そのようにお考えになります
いたたまれずカラーヴァティーは申し上げた。母上は何故またお怒りなのでしょう
わたしは他ならないあなたの娘でありますのに。夫を神のように崇めておりますのに
家名の汚れとなるまえにこの生命を捨てますものを
はつきりと申します。どうして遅れたのか、お聞き下さい
ほかでもないナーラーヤナのヴラタの作法を聞くためでございます

聖なる河の岸辺で一人の聖者が修業を積み
ナーラーヤナのヴラタ。カターを讃え歌い

他にも男女が幾人か尊いハリの物語に聞きいっておりました
そこでわたくしも主の御足にすがり、すべてを御足の下に投げすてました
もう一度このヴラタを行なおうという真実なる思いがうまれました
ナーラーヤナの神があらゆる苦悩を払うと聞いて喜びは測り知れません
どうか母上、御同意下さい。ヴラタを行なう用意を整えて下さいませ
作法はみなわたくしが聞いて参りました故遅れなさいますな
これを聞くとナーラーヴァティーはおもむろに言った。本当に今こそ思いだしました
お前がこの世に生まれでる前に夫婦でヴラタの誓いをたてたことを

それから結婚の時も幸いの元であるヴラタの誓いをたてたけれど
主の力のなさしめるところ、リーラーヴァティーよ、これを忘れてしまいました

親類縁者と寄り集い今度こそは必ず、ヴラタを行ないましょう
さあ、もう遅いおやすみなされ。わたしは今少し考えましょう
心に誓いも堅く、眠りにつけば、夢の美しさは例えようもなく
母娘は夜空の青い帳のうちに眠りについた
夜明となり鳥も目覚め、眠りから覚めた蕾は音をたてて開く
曙の女神は黄金の玉をもてあそびながら空を赤く染めた
母娘二人は夜明の到来を知り起きあがった
身仕度をすませ清浄で美しい想いを心して抱き
布施を受け二人は町へ行った
布施を持ち帰り丁重に親類縁者を呼び集め
バラモンを呼び、恭しく主をお迎えした
ヴラタのための美しい敷物を敷き座についた

ヴラタを行ない燈明をささげ礼拝し言葉も恭しく祈った
主人が戻ってきましたならば山ほどのお供えを致します

作法通りに尊いヴラタを再び勤めましょうほどに
過ちを御赦し下さいませ。幸いの主永遠に吉祥の主よ
二人の祈りを聞きとどけナーラーヤナは喜ばれた
すべての心に宿られ幸いの主であるハリ神はかのチャンドラケートウー王の前に跪れ給うた
商人たちを解き放つように王をさとし語り出された
この無_罪の商人たちを牢獄から放せ
縛めを解いてやり財貨をすべて返してやれ
喜ぶままに手段をつくし兩人に赦しを請うがよい

これにそむけば王子、王妃は亡き者となり
宝物に満ちた庫は空となり王国は乱れた麻のようになろう

主が語られお姿を消されると王は夢から覚め我に返った
たった今、ヴィシュヌ神は何と仰せられたのか驚いて王は起きあがった
身仕度をすませ宮廷に行き夢を余さず語れば
大臣たちは思慮をめぐらせ申し上げた

王よ、この夢は紛うこと ない真実でありましょう、商人たちをすぐさま呼ばせましょう
美しく身を飾り輝く衣服をお授け下さいませ
かくて商人たちを縛めから解き丁重に沐浴させ
衣服や飾りを身にまとわせよとの王の命令が下された
主の恵みは限りなくそれを授かるならば常に、ムニたちよ
幸いと富と喜びと財宝を得るであろう

商人がうなだれて捕われている牢獄へ
王の命をうけ使者が急ぎ赴いた
商人は面を起こして使者の到来を見らと思った
誰かさらに責苦を与えんものと来たものであろう
縛めをゆつくりと使者が解けば
これはまた、われらは御赦免か、二人は思わず口にした
さよう、そのとおりの御命令じゃ何も怪しむことはない
主が汝らに情けをかけられたと思ひ喜ぶがよい

王の見た尊い夢を使者は余さず話した
その夢故に王はただちに従われたのだ

主の限らない恵みを知り心に主を念ずれば
喜びに身体はうちふるえ目には涙があふれおごそかに歌い始めた

ナーラーヤナを称うべしナーラーヤナを称うべし
御身に祈る者は、幸いも富もすべてを得る
苦海を渡り解脱を得、怒りを離れる
御身は人を楽しませ苦を碎き、常に慈悲深く清らかな御方
世の束縛を断ち、幸いの主にこそあらせられる
ナーラーヤナを称うべしナーラーヤナを称うべし

塗油など終えて快よい沐浴をすれば
使者は衣服、飾りを身にまとわせ大いにもてなした
宮廷の間に二人を入れ、王は敬意を表した
自らの傍らに席を設け、下臣に命じた
この者たちの船に何一つ不足のないよう財貨を積みこめ
いささかの悲しみも残らぬよう喜びの樂を打ち鳴らさせよ

今日より汝らは余の客人、貴人よ聞かれよ
余を赦し常に余を友と思うがよい

王は丁重に言葉を続け汝らの被った苦しみは
余のせいではなく、すべてナーラーヤナの幻力によるもの
主の御威力はシヴァ神、ブラフマ神といえどもこれを得ることはかなわぬ
ましてや愚かな人間ごときいかにしてハリの海を測り知ろうぞ
王の甘美な言葉を聞き商人たちは深く喜び
王の足下にひれ伏しさらに歓喜は高まった
商人たちは申し上げた。恐れ多いことながら
わが家に帰る御許しを下さいませわれらの苦を除いて下さいませ

王は許し直ちに命じた
商人たちは神を念じつつ船に乗り岸を離れた

ハリのめでたく清らかな御姿を念じる者は
越え難い苦海をわけもなく渡るであろう
この美しくめでたいカターはハリ御自身がナーラダ仙に語りたもうたもの
それをばスータがリシたちに語られ、さらにバーラが申す次第

第 四 章

スータ仙はリシたちに申された。さて、カターのこの先をお聞きなされ
ヴェिशヌ神が再び行者に姿をやつして現われ給うた御様子を

スータ仙は語られた。リシの方々、ナーラダ仙は一心に
この上なく尊いカターに聞き入りハリは慈悲深く語り給うた
主よ語り給え、かの商人のその先の有様を
商人は主を主と悟ったでありますでしょうか。信ずる者を愛される牛飼いや語り給え
蓮華の御足近くラクシュミーは座しハリの御足をさすりたまう
ナーラダ仙は合掌し神の明かされるすべてに聞き入り
蛇王は喜びおのれの運命を誇りに思う
苦しむ者の友ハリは情をかけ信心のため千の頭を授け給うた

半開の睡蓮のような白黒桃の

ハリの眼は三種の苦しみ 傲りの悪魔を取り払う

スータは甘露で練った言葉で尊いカターのその先を語られた
乗船すると商人はハリを忘れていた
二人がいくらか進んだころ主は行者に姿をやつし給うた
慈悲の雨雲なる主はそこへ到り進みいで
商人どの、船には何が積んでありますかとにこやかに訊ね給うた
傲慢な商人はこの乞食めは欲深くねだりに来たと思い
哄笑し言うた。これ乞食坊主、銭が欲しいのか
この船は木の葉と蔓でいっぱいじゃ、あさましい奴めが

信ずる者を慈しみ牛飼いと呼ばれる神とは知らぬ愚か者
ハリをただの人と思ひ深い秘密に気づかなんだ

世界のすべてを養われる御方がいやすくも物請いをするであろうか
リシたちいやすくも日輪の光が螢に光を乞うであろうか
世を試しに巡っておられる主をこ奴は乞食と思ひこみ
あらゆる者の主であり世を養いまた滅ぼされる御方を追い返しおった
ヴィシュヌは怒りいくらか重々しく語り給うた
これ商人どのすべてあなたの言葉通りとなりましょうぞ。そして河の岸に行かれた
商人が身仕度にふける間に行者姿のハリはお姿をお隠しになられた
浮き上がり漂い始めた船を見て商人は仰天した
ここに到りサードゥはあわれにも嘆きだし
目には涙をためて卒倒した

正気に戻ると言つた。どうすればよいのか、どこへ行けばよいのか
何故こんなことになったのか、誰になんと申せばよいのか
その時婿が語ることには、父上、お氣を確かになさいませ
かの苦行者の怒りふれたのでございましょう。徒に運命を呪つてもはじまりませぬ
世を恐れさせること獅子のようなあの御仁を探しましょう
その眉の動きに魅せられて仲秋の月のように清らかなウマー女神が現われる御方を
かくて二人は尊い牛飼いのハリを探ね始めた
苦しむ者の主はすべての心に住み給ひ慈悲深く幸いを分かたれる美しい館
嘆きつつ目には涙をたたえ、心の内でハリの御足にすがり祈つた
今再び御顔をめぐらせ、お姿をあらわし下さいませ、クリシュナよ

その時、肉体を持たず、欲望を離れ知り難い御方が間近にあらわれ給うた
言葉でどのように言い表わそうともその秘密は知ることはできぬ

広く美しい海辺に睡蓮の眼の主は腰を下ろしていられた
鹿皮を敷き額には吉祥の印
その麗しいお姿を常に胸に思いうかべる者は
苦海をたやすく渡りこの上ない四果を授かる者なり
思いを凝らし三昧境にあらせられ恩寵のまなざしをかけ
創造物を滅ぼしたまた守られる御方は幻力を操り坐しておられた
菩提樹のような美しい御姿をそこに認め商人は息をのんだ
神徳の主のようにかの行者の聖なる面は光り輝いていた

商人サードゥは両手を合わせ
助けを求めて倒れ伏し徳を讃え始めた

主の御前に平伏の礼をして哀願し
慈愛の主よわれらをお赦し下さいませと申し上げ様々に泣き嘆きだした
驚くべき喜びの源泉であり全宇宙を動かされる
御身は常に喜びを分かたれ滅ぼされ維持せられ養なわれる御方
ブラフマ神、シヴァ神ら他の神々にしてすでに御身を知り尽くすことができませぬ
われらごとき愚かにしてけがれた者がいかにして御身を知り得ましょうぞ
御身は常に物事の始めにして御身の意向によってこそ
すべての幸いは得られ苦しみは見る間に残らず消え去ります

幾度も幾度もこのように願いをくり返せば
ついに慈悲深い主は時宜に適しい言葉を語り給うた

汝は余を忘れ大いなる苦しみに陥ったが
余の恵みによってこそ失ったすべての財貨を今再び得るであろう
リシたちよ主の恵みによって船は再び荷で一杯となったのじゃ
受けた程の苦難は瞬時にして消え去った
ナーラダよ、余を忘れ果てるとはかの男もとてつもない愚か者
すべてを見通す主である余を忘れ幸福を失うてしまうとは
さればこそ賢者たちは余を常に心でも言葉でも抱き所となすのじゃ
至上の喜びをもたらす強い雨を郭公が待ちこがれる

かく語り給うとハリはすぐさまそこから姿をおかくしになられた
商人はつきることなき神徳を讃えた

主の清らかな御姿を心に抱き二人の商人はわが家に向けて出立した
懐しいラトナブリーに近づいたころ夕暮れとなった
吉報を伝えようと使いを側に呼び寄せ
河の明かるい岸辺に静かに降ろさせた
急ぎ家に行きサードゥと婿と仲間らはみな無事帰りついたとの
この喜ばしい知らせを伝えさせた
この上なく清らかな河の水はみな心を魅了し
夕日の赤い光の網が頭上を覆っていた

使者は命令に従い直ちに出発し
恭しく礼をし吉報を伝えた

家では母娘がナーラーヤナ語りに余念がなかったが
吉報を聞き使者を祝福し心は喜びで浮き立った
母は礼拝し夫と婿のもとへと赴いた
心にナーラーヤーを抱きはするが、足は夫に通じる道へと向いていた
喜びは抑え難く夫との再開の狂おしい願いは
刻々と野火のように燃え広がった
母は静かに言った。娘や、お下がりを頂戴してから来なさい
いいかえ、よくよく注意して二度と間違いを起こさぬようお下がりをいただいてから

ハリのお怒り招かぬようによく気をつけなされ
しばし娘は残ったものの愛しい夫の顔見たさにすぐさま家をとびだした

母は十分言い聞かせたものの宿命は避けられず止められず
すべての主を忘れわが夫に会いにでた
母の教えもみな忘れお下がりもチャラナムリタ¹もいただくず
河に急ぎ向かえばナーラーヤナはお怒りになられた
三界の主として万能にして幻力を備えすべての心
をお見通しになれるナーラーヤナ神を娘は忘れ果てた
到ってまさに仰天す。夫もいなければ船も見当たらぬ
泣く泣く言った。一体どこへ行かれたのです。母上わたくしたちは欺かれたのでしょうか

何の返事も得られず苦しみに
ひどく涙を流し嘆き悲しんだ

帰ってこられたのか帰ってはこられなかったのか、母上は喜び言われたけれど
わたくしの身も心もみな燃えつきたのか、この死のような静けさは
想いは熱気のようにあふれこぼれ目は道を探っていたものを
夫はどうして会うのを避けたのか、愛憎の狂おしさがつのるばかり
父上様胸には炎が燃えあがり目には煙が走ります
雲よお前だけは教えておくれわたしの愛しい人を見たのかどうか
清らかな風よ香り高き花よわが君の様子を教えておくれ
金の瓶を手にした夕暮れの踊り子よ蓮華にとびかう蜜蜂を見たならば言うておくれ

空と水と地の生き物たちよ誰かわたしを助けておくれ
わたしが愛しの君を得ればそなたたちは名を挙げようあわれな者に恵むは尊きこと

四天王よ一言お言葉をどうか愛しの君に会わせて下さいませ
愛しい御方、慕情の若鳥から羽の艶を奪ってしまわれるおつもりか
母は泣き叫び言った、娘や娘や心を落ちつけて
わたしと一緒に祈りましょう。ナーラーヤナは人の苦悩を払って下さるのだから
苦しむ者の友なる神よ急ぎ来たりませ
御身は多くの者をお救いになられました。御姿をあらわせ給え主よ
苦しむ者を憐れむ御方と名づけられますのにわたくしを救うのにためらわれておいでとは
主よ、いかで慈悲と申せましょう
苦海にわたくしの船は漂い罪の嵐にもまれております
来たりませ滅びることのない主よ
もはや御約束をお忘れになられたのでしょうか

御怒りになり離れてしまわれるとはわたくしどものいかなる罪の故でございましょう
恐しい災難の黒雲が夫と船を襲いさらってゆきました
商人は探し探してついに精根つき果てた
気を失い地面に倒れ知恵も理性も消え失せた

船乗りたちが探しはしたけれどハリの幻力は限りなく
常に愚かな人の知恵では一体どうして知り得よう

履き物を手につかみ夫の後を追おうとした時
すべての者の耳に天からの喜ばしく清らかな声が響いた
こりもせず余に背けばこそ激しい苦悩をこうむるのだ
余の力を知ることでもできず幾度もお前たちはさ迷っている
余のチャラナムリタを捨てお下がりも口にしなかったではないか
さればこそ商人と婿とお前たちすべてが苦しみをこうむったのだ
急ぎ家に行きお下がりとチャラナムリタをいただいてくるがよい
さすれば最愛の夫を取り戻しすべての者に喜びを与えるであろう

このようにめでたい喜びのつきせぬ泉のような
清らかな声を耳にして心は満ちたりた

すべての男女は幾度も地に平伏の礼をくり返し
主の御威光を目の当りにして驚くばかりであつた
カラーヴァティーは幸いの海の主であるハリの嘉し給うように
チャラナムリタとお下がりをいただきに直ちに家に帰った
家につき恭しく主に赦しを請うた
わたくしをあわれみどうか闇と苦を払い給え
恭しく再び主のチャラナムリタをゆつくりと飲んだ
そして夫とまみえるいやし難い渴きを胸に感じてかけ出した
夫と船をともども見つけると立ちつくしたまま神を讃えた

ゴーヴィンダを称うべしヴィシュヌを称うべし
徳高き者に幸いを恵み無尽の徳を備える 貴い御方
信ずる者の苦を砕くハリの神
心寛く慈悲に富み信ずる者を慈しむ神
常に喜びの破れることのない神
すべての心を見通す御方を称うべし
静かに花を訪う蜂の如き神よ
この世の苦を打ち破る御方シヴァ神の胸の湖に咲く蓮に宿られる御方
喜びと蜜の海のようなヴィシュヌ、ゴーヴィンダを称うべし

このように讃歌に浸り歌う
赤睡蓮のように光り輝く月のかんばせの夫にまみえて

喜び言うた。父上様さあ家に帰りましょう
さあ、母上急ぎ参りましょう。嬉しさのあまり倒れなさいますな
友人仲間を伴い商人はわが家に向かった
サンクラーンティ²と満月の日には名号を唱え祈りを捧げ
恵みを請い幸いを与える御身を決して忘れは致しません
常に恵みの雨を降らせわが家に富を満ちあふれさせたまえ
かくて胸にハリへの新たな思いを抱きハリの色に染められていった
罪と苦しみ悩む時は主の御足の清らかな埃を求めた

ムニたちよ賢明なヴィヤーサ仙はかく語られた
商人は大いなる幸いを楽しみついに主の館に行った

徳高く賢いサードゥはハリを尊び天界に行った
信愛の光の中で罪を洗い清めたのだとハリは語り給うた
幾世を経ても平安を与えるこのヴラタはスータ仙がリシたちに語られたもの
喜びを与えるこのカターは欲情から人を解き放つもの

(註)1 神像を沐浴させた凝乳、牛酪、砂糖、蜂蜜入りの牛乳。

2 太陽が十二宮の一から次に入ること

第 五 章

ナーラダ仙は恭しく合掌し申し上げた
主よ世の苦しみを払い、美しく深遠な物語をお聞かせ下さいませ
喜びの主、ヴィシュヌは語り給うた。ナーラダよ汝の願いはこの上なく喜ばしい
世界のために汝が生まれたその国はなんと幸運であろう

ナーラダよ、風雅の元であるこの測り難いカターのその先を聞くがよい
ヴィヤーサ仙は語られた。リシたちよ、主がいかにして世の苦しみを除かれたか聞かれよ
スータ仙はリシたちにさあ各々方この先何をお望みかと訊ねられた
リシたちは答えて、黒雲に輝き渡る日輪の光の如きカターの先をお聞かせ下さいませ
されば、リシたちよ、お聞きなされ、カターのこの先を語りましょうぞ。
一人の王がお下がり捨てたばかりに苦しみを受けた次第を語りましょう
トゥンガドゥヴァジャという名の一人の王が常に臣民を慈しみ守っておった
その富と威勢ははなはだしく、どのような敵にも恐れることがなかった

ある日王は遠く狩りに出かけた
多くの獣を射殺し、疲労困憊した

バンヤン樹の下に至って王は牛飼いたちが沈黙を守り
みながどなたか貴い御方を心にとどめ拝んでいるのを認めた
王は挨拶もせず、心に敬まいもしなかった
みなから離れて王は腰を下ろし、ハリの御威光に気づかなかつた
牛飼いたちは礼拝し、ハリの燈明を捧げてから
お下がりとチャラナムリタを恭しく王の前に供えた
心の罪深い傲慢のために王はそれに触れず
そうそうに休息を終えわが城に向けて出発した

王の幸いと富の一切が直ちに滅びさり
息子をなくし王妃を失ない心は打ち砕かれた

王は思った。余は傲慢にもハリのチャラナムリタをいただかなかつた
主はお怒りになられて余から御慈悲の御顔をそむかれたのであろう
もう一度あの森に行きお下がりをいただくう
ハリの信徒を敬いハリの物語を語り徳を讃えよう
牛飼いたちが住んでいた森に向けて王は出かけた
ハリの礼拝に没入する者は主の愛と喜びを受ける器
燈明を捧げ礼拝し主は直ちに王を嘉し給うた
恭しくお下がりとチャラナムリタをいただき幸いを享受した

ハリ神のお下がり故に新たな富と力を得
心も嬉しく王は作法通りに礼拝した

この世で富み栄えた後王は天界に昇った
主のお下がりをいただいて心は喜びに満ち徳と知を得てすべての苦は消え去った
汚濁の世に於てウラタの誓いを完うする者は深い力を備え
欲望を離れ主の名号を唱える者はこの世の束縛から解き放たれる
ハリ御自身が語られたこの御利益を与え読み聞くことにより
尽きざる利益をもたらす清らかな真実の証たるカターを汝は聞いた
このウラタを行なえば恐れ苦しむ者は恐れから逃れ
病む者の身体から病は去り常に幸いと富に恵まれる

転生の束縛に再び捕われぬよう常に名号を唱えよ
ハリの作法をすべての者の心に知らせ徳の主の名号を唱れよ

転生の苦を減し戦いに於いては勝利をもたらし
苦海を渡らせる蓮華のように幸福を満たされる御方
さて今からこれらの者の転生の様を語り明かそう
ナーラーヤナのヴラタは荒れくるう海を渡る船。無数の罪人を渡す
幸いも富もすべてを享受したかの賢明なるバラモンのシャターナンダは
再び生をうけスダーマーとなり、クリシュナに仕えて解脱を得た
かの森のたき木売りは再び生まれてグハラージャとなり
ラグのうからの宝玉なるラーマに仕えて解脱を得た

常に念じて皆主の名号を唱えよ
蓮の御足の埃をいただいて果てない苦海を渡るべし

ウルカームカ王は再び生まれてダシャラタ王となり
シュリーランガに嘉され天界の生を恵まれた
かのサードゥなる商人はモーラドゥヴァジャ王に生まれかわり
かけがえのない息子を鋸で切らせて深い信心でクリシュナ神に嘉された
自らヴィシュヌ天界に生まれ一族の多くの者も救われた
現世では名声を広め父祖たちを救った
トウンガドゥヴァジャ王は再生して主の信愛の徒スヴァヤムバヴァ・マヌとなり
清浄な解脱を得て生死の束縛を断った

リシたちは皆徳の主にして苦海に生きとし生ける者の
渡し手である主の徳を讃え始めた

この苦しみを払うカターをハリがナーラダに語り給い
世のための美しい橋を知るヴィヤーサ仙は正しく語りたもうた
ハリの行者スータ仙は慈悲深く麗しいカターを語られた
汚濁の世に再びバーラが知恵の限り真心こめて申し上げたり

〔筆者略歴〕 バールクリシュナ。バール・セーティー (Sethi) 1934年生まれ (ラーホール市)
M. A. (Hindi). 現在、インド国文部省ヒンディー局勤務 (Kendriy Hindi Nideshālay).
Balkrishn 'Bāl', Shri Satyanārāyaṇa Vrata Kathā, Girdhārīlāl Thok
Pustakālay, Dēhli

(訳・註 高 橋 明)